

不埒な恋愛カウンセラー

『このたび、慶和高校三年六組の同窓会を開く事になりました。

つきましては一人でも多くの方にご出席をお願いいたくご案内申し上げます。

【場所】渋谷駅南口から徒歩三分にある「居酒屋・わっしょい」

【時間】午後七時から十一時まで

記念すべき第一回の同窓会です。

ご多忙中とは存じますが、八年ぶりに顔を合わせる絶好の機会となります。

ぜひともご参加くださいますようお願い申し上げます』

「同窓会かあ。高校卒業して、もう八年になるんだ……」

笹岡衣織は、スマートフォンささおかいおりのメール画面を開いてからもう二十分以上も物思いに耽ふっている。気が付けば真っ暗になった画面に映る自分と、覇気はきのないにらめっこしていた。

先月二十六歳になった衣織は、高科商事たかしなしょうじという、繊維や樹脂等の化学製品を取り扱う商社で役員秘書をしている。入社当初から秘書課に配属され、海外事業部の田代常務取締役たしろに付いたここ一年

は、それまで以上に日々忙しく仕事をこなしている。そう言うところとちよつとしたキャリアウーマンを想像するが、実際の衣織は違う。

やや丸顔にくりつとしたリーフ型の目。ちんまりと形のいい鼻に、ふつくらとした唇。いまだ学生に間違われるほどの童顔と、ちよつと大きめのヒップが長年のコンプレックスだ。

性格も大人しいし、普段着る服も無難で暗い色合いのものばかりと、全体的に地味で冴えない。そのせいもあるのか、衣織はこれまで一度も男性とまともに付き合つた経験がなかった。

卒業して八年、もう結婚して子どもがいる同級生だつているというのに。

「それに引きかえ私は……どうしてかなあ……。なぜか、まったく縁がないんだよねえ……」

ふーつと深いため息をついて、衣織はもう一度スマートフォンメール画面を表示させる。

大学二年生の時、何度かデートらしきものをした事はあつた。バイト先で知り合つた二つ上の大学生からある日いきなりSF映画に誘われ、その後二回ほど居酒屋で食事をした。他は、バイトのシフトが重なつた時に駅まで一緒に帰つたくらいだ。

そんな曖昧な付き合いが続いた二ヶ月後、その人からいきなりバイトを辞める事を伝えられた。

『じゃ、もうお別れだね。今だから言うけど、衣織つて、一緒にいてもなんかつまんなかつたんだよね』

そんな捨て台詞以降、男性と縁がないまま今に至る。当然キスも——セックスだつてした事がない。

「あーあ、二十六にもなつてヴァージンだなんて……」

自虐的な思い出に浸つたところで、再び深いため息をひとつ零す。

この頃、こんな風に一人落ち込んでため息をつく回数が増えていくような気がする。

たまに会う友達は皆それぞれに綺麗になつて人生を謳歌しているというのに、自分ときたらどうだろう。外見も中身も高校の時からさほど変わっていないどころか、今日だつて貴重な休日を読書とメールチェックだけで終えようとしている。

自分だつて、人並みに彼氏を作つて素敵な恋をしたい。だけどいつたい、いつどこに行けば自分だけの王子様に出会えるというのだろう。

同窓会のお知らせメールには、「出欠」と名前のついたファイルが添付されていた。それを開くとすでに出席を示す丸印がいくつかついており、そのうちの何人かは結婚して姓が変わっている。

「あつ」

衣織の視線が、ある名前でびたりと止まる。

その途端、衣織の頭の中に当時の懐かしい思い出が一気に蘇つた。

「風太郎、同窓会に出るんだ」

佐々木風太郎。

衣織がこれまで生きてきて、唯一想いを寄せた初恋の相手だ。

風太郎は、当時バスケットボール部のエースにして、クラス委員長。生徒会長も務めた事があり、容姿端麗の上に成績も優秀だつた。一年生と三年生の時に同じクラスだつた彼とは、卒業後は一度も会っていない。

「懐かしいなあ。風太郎……高校の時の一番の思い出だね。ほんと、楽しかったな……」

高校の三年間、ずっと彼の事を想い続けていたけれど、その事は誰にも言わなかったし、もちろん本人に伝えるなんて思い切った事も出来なかった。

人気者で頼りがいのある風太郎は、友達から相談を持ちかけられる事もしょっちゅうだった。そのほとんどがなぜか恋に関する悩みだったが、彼はそのひとつひとつに親身になって向き合い、その都度的確なアドバイスをしていた。

それが彼の進路に影響したのか、風太郎は大学で臨床心理学を学び、心理カウンセラーとなった。そして、今やテレビや雑誌でも見かけるイケメンカウンセラーとして大活躍しているのだ。

元同級生が超有名人に？

その事が知れ渡った当初は、みんな驚いたし、テレビ越しに見る風太郎の更なるイケメンぶりに目を見張ったものだ。

その風太郎が、同窓会に来る。参加すれば、八年ぶりに彼に会える。忙しい彼の事、てっきり欠席だと思っていたのに、まさか参加するとは――

彼が来ると知った途端、心がウキウキと弾んできた。それまで薄曇りだった心に、一筋の光が差し込んだようだ。

風太郎は、きつと一段とかつこよくなっているに違いない。

せっかくだから、服と、それに合わせた靴を新調しよう。

美容院にも予約を入れておかなければ。同窓会当日まで、あとひと月もない。

「自分を変えるいいきっかけになるかも……うん、がんばろう！」

具体的に何をどうすればいいかわからないけれど、とりあえず変わる努力をしよう。漫然とスマートフォンを弄もっているだけでは、きつと何も始まらない。

衣織は、メールに出席の返事を返した後、口元にきゅつと決意の微笑みを浮かべた。

四月初めの日曜日、午後六時三十五分。

ここ渋谷駅南口は、いつも通りたくさんの人でごった返している。

同窓会の会場は、駅からすぐの距離にあるチェーン店の居酒屋だ。午後七時開始なので、行くには早いけれど、どこかに寄り道をするほどの時間はない。

(さすがに、ちよつと早く来過ぎちゃったかなあ)

駅の改札を出てすぐにある柱の横たすに佇み、衣織は今日のために新調したワンピースの裾を見つめた。

(ほんとに似合ってるかな。やっぱりもつと落ち着いた色にした方がよかったのかも……)

衣織が普段選ぶ事のない桜色のワンピースは、顔見知りのスタッフにすすめられるまま試着もせず買った。

同系色のハイヒールに、緩ゆるく巻いた肩までの髪の毛。思い切って買ったオレンジ系のルージュは予想外に艶つやがあって、浮ういてやしないかと今になって気になりだす。

同窓会に出ると決めた時から、自分なりにいろいろと努力してきた。メイクだって研究したし、

日頃健康のために通っているスポーツクラブで、ダイエットコースを試したりもした。たった数週間で満足のいく結果は出なかったけれど、やれる事はやったつもりだ。

『変わりた。素敵な恋がしたい』

そう願う自分の気持ちだが、同窓会に出る事で更に勢いづけばいいと思っている。とりあえずぶらぶらして時間をつぶそうと、少し歩いた先にあるレンガ造りのビルの前まで歩く。東京に住み始めて八年になるのに、いまだ都会の喧騒には慣れないし人混みも得意ではなかった。手に持ったスマートフォンを覗いてみるが、さっき見た時から五分も経っていない。

「うーん……」

辺りを見回すも、元同級生らしき人は誰一人見当たらない。仕方なくまた歩き出したその時、後ろから聞き覚えのある甲高い声に呼び止められる。

「衣織？ 衣織でしょう？」

振り向いた衣織は、目の前でにこにこ笑っている女性を見つめた。長い睫毛に大きな目をしてる女性の胸元には、ゴージャスな巻き髪がのっている。

「ええっと……」

（誰っ？ ……私の名前を呼ぶって事は、絶対今日の同窓会メンバーだよな？）

「さっきまで友達と会ってただけけど、ちよつと早く来すぎちゃった。でも、衣織がいてくれてよかった」

話している内容からしても、同窓会に来たメンバーに間違いない。とりあえず、目の前の女性と

同じように笑おうと口元を緩めてみる。

（えーっと……うわー、どうしよう、思い出せない！ 向こうはわかってくれているのに。ものすごく気まずいんですけど……）

思い出そうとすればするほど、頬が引きつって笑顔がますます不自然になる。

「あれえ、もしかしてわかんないの？ 私よ、加奈子！ 高校の時、同じ英語研究会だった森山加

奈子よ！」

名前を聞いた途端、衣織は、銀縁の眼鏡をかけ、長い髪をいつもひとつに束ねていた少女を思い出した。

「えっ、加奈子？ うわっ、ごめん！ ぜんっぜんわかんなかった！ なんかすぐ変わったね」

そう言えば、声だけは間違いなく加奈子のもんだ。だけど、外見がまるで違う。当時丸かった身体はすっかりと引き締まっているし、綺麗にメイクした顔は本当に別人のようだった。

「でしょでしょ？ こうなるためにただお金を掛けて努力したか……おかげで人生変わったわ。っていうか、衣織は高校の頃とぜんぜん変わってないね！ 一目見てすぐにわかったわ。さ、早く行って、近くの席に座ろうよ」

「う、うん」

ぐいと腕を引かれて、衣織は加奈子と一緒に会場のある雑居ビルに入った。

（加奈子ってこんな子だったっけ？ 昔はもっと大人しくて、私と同じくらい地味な子だったのに……）

衣織は、ショーウインドウに映る自分の姿をちらりと見る。

(ゼーんぜん変わらない、か……これでも最大限努力したつもりなだけだなあ)

そつため息をつき、また階段を上り始める。

目の前を行く加奈子が着ているのは、華やかな花柄のワンピース、そして高さのあるハイヒール。いかにも女性らしいコーディネートは、日頃いいなと思っても自分ではどうしても着こなせない類いの組み合わせだ。

そんな事を考えていたせいか、足元がおろそかになった衣織は、階段の途中であやうく転びかけた。

「うわっ！」

手すりにしがみついたので無事だったが、下を見ると靴の先に小さな傷が出来てしまっている。

(幸先、悪……！)

そう思った瞬間、おろしたてのハイヒールが、急に合わなくなったような気がした。

春らしいと思っていたワンピースの色も、薄暗い階段ではくすんだ肌色に見える。

「衣織、遅いよ！ 早く早く！」

「……うん、今行く！」

(駄目駄目！ せっかくの同窓会なのに落ち込んでる場合じゃないでしょ！)

そう自分を鼓舞して、衣織は手招きする加奈子に笑いかけ、勢いよく階段を駆け上った。

「はーい、全員注目！ まだ来てない奴もいるけど、時間になったから始めます。みんなコップ持ったか？ では、三年六組の再会を祝して、カンパニー！」

幹事である元放送部の戸田が音頭を取り、同窓会が始まった。

会場となった部屋は長テーブルが縦に三つほど並べられた和室で、床には所狭しと縞模様の座布団が置かれている。衣織が座つたのは、部屋の一番奥にあるテーブルの隅っこだった。周りには比較的大人しめのメンバーが固まって座っている。

総勢三十二名の元同級生のうち、欠席は五人。かつて同じ教室で机を並べていた生徒達は、今やそれぞれの道を歩み、職業も家族構成もばらばらだった。外見も変化しており、驚くほど老け込んだ女子や、恰幅がよくなった男子がいる。

「衣織ったら、どうかしたの？ 何だかぼんやりしてるみたいだけど」

隣に座る成瀬朋美が、衣織の肩をトンとつついた。彼女は当時から一番仲の良かった親友だ。卒業後もたまに会って遊んでいたが、彼女が結婚して一児の母になってからはなかなか会えなくなっていた。今日は子どもを預けてから直接会場に来るという事で、一緒に来られなかったのだ。

「ううん、なんでもないよ」

そう言っつて、衣織はにつこり笑った。実は、さつきから入り口が気になっている。

同窓会が始まってからもう一時間が経つというのに、肝心の風太郎がまだ顔を見せていないのだ。(風太郎、いったいどうしたんだろう)

ちよこちよこ口をつけるグラスは、いつの間にか空っぽになってしまった。

「今日はペース早いね。衣織、いつの間にお酒強くなったの？ やっぱ役員秘書ともなると、お付き合いが多くて飲みなれちゃったりするわけ？」

そう言う朋美も、かなり頬を赤くしている。妊娠を機に禁酒した彼女だったが、子供が離乳食を食べ始めると同時に、アルコールを解禁した。

「ううん、強くなつてないよ。秘書といつても、テレビで見るような華やかな部分なんてほんの一部だから、飲む機会はそんなにないし」

小さい頃から人見知りで、初対面の人と会うとなるといつだってひどく緊張する。

特に男性——。仕事中であれば平気だが、それ以外の場面では異性というだけで苦手意識が先に立つてしまう。それを承知してくれている常務は、衣織にとつて理解ある上司だ。必要に迫られてレセプション等の華やかな場所に行く事はあつても、裏方に回れるよう配慮してくれる。

「ここ、ちよつと暑くない？ みんなの熱気で温度上がつてるのかな」

衣織は掌をばたばたと動かし、火照る頬に少しだけ風を送る。

肩から外したショールを見て、ふとある事に気付いた。それは、ごく薄いピンク色をしていて、バッグも同色系。よくよく見れば、今夜自分が身に着けているものは全部同じような色合いのものばかりだった。なんだか野暮つたく感じてきて、衣織は恥ずかしくなる。

「そう？ ま、飲むも。せつかくみんなとも久しぶりに会えたんだし、飲まなきゃ損！ 私も注文しちゃおうっと」

朋美に促されて、衣織はアルコールのメニューを手取る。

その時、すでに出来上がっている様子の戸田が、突然立ち上がって大声を出した。

「風太郎、遅いぞ！ もう来ないのかと思つただろ」

衣織はもちろん、部屋にいる全員が一斉に入り口の方を振り返る。

「遅れてごめん。出掛けに急な仕事が入つちやつて」

（風太郎！）

みんなの視線を浴びた風太郎は、ちよつと照れくさそうに片手を上げて挨拶する。

百八十センチを優に超える長身に、無造作にセットしたストレートの黒髪。やや切れ長な目元に濃褐色の瞳。すつきりと伸びる鼻梁と形のいい唇——昔から誰が見ても納得の美男子だった彼が、大人の魅力をまとい、微笑んでいる。

服は、濃紺のジャケットに淡いブルーのシャツを合わせ、襟元はノーネクタイでボタンをひとつ外している。とてもおしゃれで、雑誌やテレビで見るより何倍もかっこいい。

「うわあ、懐かしい！」

「元氣だったか？」

風太郎は話しかけてくる友達と肩を叩き合い、楽しそうに笑い声を上げる。

（風太郎、思つてた以上にかっこよくなつて……そこらにいる芸能人なんて目じゃないよ！）

衣織のテンションは一気に上がった。さすが、当代きつての人気カウンセラーだけはある。

（やっぱり来てよかった。生の風太郎を見られただけでも、テンションが上がるし。でも、出来る事なら一言二言は話したいな……）

グラスに口を付け、何気ない風を装って彼をじっと見つめる。

風太郎の視線が、部屋の中をぐるりと巡った。元同級生の顔を一人一人確認し、部屋の隅にいる衣織の上でぴたりと止まる。

（あ、風太郎、こっち見た——）

途端に身体が緊張して、グラスを持つ指に力が入った。

「風太郎、こっちこっち！」

突然視界が遮られて、店中に聞こえるほど高い声が部屋の中に響いた。

「ずっと待ってたのよ。ほら、ここ座って？ 風太郎の特等席！」

真ん中のテーブルにいた加奈子が、立ち上がったって大袈裟に手を振る。その途端、華やかに着飾った女性達が申し合わせたように集まりだした。

「おい、風太郎。こんの色男がワザと遅れて来て女連中の視線を独り占めかよ！」

「そうはいいか、俺も交ぜろ！」

戸田ともう一人の男友達に脇を固められた風太郎は、そのまま引き摺られるようにして用意された席に腰を下ろした。隣のテーブルの真ん中にあるそこは、衣織から三メートルほど離れている。

少し距離があるので話しかけられないが、彼の様子は窺える。

「これで全員揃いました！ ってところで、もう一回カンパイ！」

戸田が飲みかけのジョッキを振り上げると、周りにいる者達もそれにならない、グラスを掲げた。乾杯が終わるや否や、戸田や加奈子が我先にと風太郎に話しかける。

それを横目で見ながら、衣織はグラスの中に残った氷を口に含み、コリコリと噛み砕いた。

彼の人気からしてこうなる事は予測していた。まだ会は続くのだし、運が良ければちよつとくらい話をするチャンスがくるかもしれない。

「ちよつと戸田君達、邪魔っ！ 私達、今日は風太郎と話をするために来たんだから」

ふくれっ面の加奈子が、風太郎を挟み込む男達を睨む。

「ふざけんな。お前らどうせ恋愛相談ばっかだろ？ だったら女子は後っ」

風太郎は、別に恋愛を専門にカウンセリングしているわけではない。だが、彼に持ち込まれる案件は恋愛に関するものが多数を占めているらしい。そのため、よく『恋愛カウンセラー』と紹介されるようだ。

「なんでよ！ 男子こそ後にしなさいよ。あんた達だってそのつもりのかせして」

クレームを言う加奈子に、風太郎が屈託のない笑顔を向ける。

「みんなちよつと待ってくれよ。話は一人ずつ聞くから。それと、とりあえず俺にもビール飲ませて」

「あ、悪い、まだ何も飲んでなかったよな」

「いいよ、遅れてきた俺が悪い。他にもグラス空いてるやつがいるだろ？ ——あ、店員さん！」

騒がしい店の中に、風太郎の伸びやかな声が響いた。すぐさま店員がやってきて注文を聞き始める。矢継ぎ早に話しかけられてもちよつとも怒らないという、相変わらずの神対応だ。

運ばれてきたジョッキを受け取るなり、そばにいる全員が彼と杯を合わせたがる。その中に入れ

ない衣織は、仕方なく心の中で風太郎に向けてグラスを掲げた。

風太郎が、ごくごくと美味しそうにビールを喉に流し込んでいく。くつきりと尖る喉仏が上下し、黒々とした眉にぎゅっと力が入る。

(うわぁ……、ビール飲む仕事までかつこいい)

頭の中で賞賛の声を上げた衣織は、口元がにやけそうになるのを唇を噛んで誤魔化す。

「風太郎、先週出てたファッション誌、見たわよ。春のデートコーデ特集！あの時着てたスーツ、すっごく素敵だった」

「ありがとう。あれ、知り合いのコーディネートなんだ。今度会った時、好評だったって言うておくれよ」
「……風太郎、そんなのにも出てるのか？相変わらず仕事忙しそうだな。来月のバスケット部OBの試合、大丈夫か？」

「ああ、ちゃんとスケジュール組んであるよ。久々の試合だし、絶対参加する」

「この間のテレビもよかつたわね。芸能人の恋のお悩み相談室ってやつ」

「それ、俺も見だよ。メディアの仕事しながらクリニックに勤務するって、大変じゃないのか？」
心配顔の同級生の顔に、風太郎は笑顔で応える。

「うん、それなりに大変だけど、すごく楽しいよ。クリニックの宣伝にもなるし、院長も協力的なんだ」
ひっきりなしに話しかけられつつも、風太郎は合間を縫ってビールを飲み、おつまみを口に運ぶ。その様子を見ながら、衣織は高校の時の風太郎の事を思い出していた。

(風太郎の周りには、いつだって人だかりが出来てた。ワイワイ言っすぐく楽しそうだった

なあ)

むろん、自分はその中に入っていなかったが、それをちよつと離れたところで見ていただけでも楽しかった。

そう、今と同じだ。いくらクラスが同じだったといっても、自分の立ち位置はずつと変わらない。だけど、それほど人気のある風太郎なのに、不思議と浮いた話ひとつ聞かなかった。あれだけかつこよければ、彼女の一人くらいいてもおかしくないのに……それとも、上手く隠していただけだろうか？どちらにしても、だからといってどうという事もないが――

「ねえ、風太郎。女優さんから連絡先とか渡されちゃったりするの？ってか、ここだけの話、風太郎って彼女いるの？」

いつの間にか、ちゃっかり風太郎の隣に陣取っている加奈子が、あけすけな質問をぶつける。

それに対し、風太郎は動揺することもなく口を開いた。

「残念ながら、今は彼女いないよ」

「えええーっ、嘘お、ほんとに？」

さらりとした風太郎の答えに、彼を囲む女性達が一斉に色めき立つ。

「本当だよ。ここんとこ仕事が忙しくて、それどころじゃないな」

(風太郎、彼女いないんだ。ふうん、そっかあ……)

それを聞いた衣織も、心の中でほつと胸を撫で下ろした。衣織にはなんの関係もないが、好きだった相手なのでそれくらい気になって当然だろう。

「ねえねえ、風太郎の患者さんって女の人が多いんでしょ。悩みを打ち明けるって、相手を信頼してないと出来ない事だし、なんかこう……自然と親密な感じになっちゃうんじゃない？ カウンセリングしてる途中で、患者さんの事好きになったりしないの？」

その質問に、衣織の耳がまたぴくりと反応する。彼がカウンセラーになったと知った時から、それについてはなんとなく気になっていたのだ。

「患者さん——うちのクリニックではクライエントっていう呼び方をしてるんだけど、カウンセラーは、クライエントとは絶対に恋愛関係にならない。そういう決まりがあるんだ。でなきゃ、まともにカウンセリングが出来なくなるから」

風太郎の答えに、周りの女性達が一様に頷く。

「ふうん。じゃあ風太郎を落とそうと思ってクリニックに行っても無駄なんだね」

「私、明日にでも、風太郎のところにカウンセリング受けに行こうと思ってたのに」

「あ、私も」

冗談とも本気ともつかない言葉を、風太郎は軽い笑い声で受け流す。

「お前ら、風太郎のカウンセリング受けるのに、予約もなしって無謀すぎるだろ！」
ひとしきり笑い声が聞こえて、また違う質問が始まる。

相変わらず呆れ返るほどのモテっぷりだ。この調子だと会が終わるまで、風太郎に近寄る事すら出来そうにない。いや、きつと会が終わっても無理だろう。

衣織は、諦めと共にそつと肩をすくめた。

（せっかく会えたのに、一言も喋れないで終わるのかあ……。でも、それも仕方ないよね。あのイケメンっぷりだと、将来は美人女優やモデルと結婚して週刊誌に載っちゃうかも）

衣織の頭の中に、黒のタキシード姿の風太郎が思い浮かんだ。隣にいる花嫁は、白いヴェールを被り、彼の腕に手袋をした指を絡めている。一瞬、それが自分だったら……。なんて想像しそうになつて、衣織は赤面する。

「衣織、どうした？　なんか顔赤いよ？」

朋美に気付かれ、慌てて頬を掌で隠す。

「あ、ちよつと飲みすぎたかな？」

この手の誤魔化しは、高校の時からお手の物だ。衣織が風太郎を好きでいた事は、当時も今も誰一人知らない。

「でもすごいよねえ、うちのクラスからあんな有名な名人が出るなんて」

「風太郎が同窓会に来るって言ったら、うちの旦那にサインもらってこいって言われたわ」

「俺の奥さん、なにげに風太郎のファンなんだよ。まあ仕方ないよな。ルックスだけじゃなく性格もいって知ってるから、男としても文句のつけようがないよ」

そんな同級生達の会話を耳にしつつ、衣織は取り分けた野菜サラダに箸をつけた。

「で、衣織は相談しなくてもいいの？」

お刺身を摘みながら、朋美が軽く肩をぶつけてくる。

「えっ、私っ？　誰に、何を？」

驚いて横を向くと、朋美が視線だけで風太郎の方を示した。

「もちろん、風太郎に恋愛相談を、でしょ。せっかく今話題の恋愛カウンセラーがいるんだから、ちよつと行って来たら？」

「……いや、無理でしょ。ほら、すごい順番待ちだよ？」

箸を動かしながら、二人して風太郎のいるテーブル席を眺めた。彼の横には加奈子がへばりついているし、戸田はマネージャー気取りで相談者達を仕切り始めている。

「そういえば衣織、三年の時にクラス委員してたじゃない。そのよしみで優先してもらえば？ なんなら私が言ってきたあげようか」

「いやいやいや、朋美待つて！ それはいいよ！」

立ち上がるうとする朋美を慌てて押し止めて、衣織は首をぶんぶんと横に振った。

「なんでよく。彼氏欲しいんでしょ？ 前に、会社と自宅との往復だけじゃつまらないって言うたじゃない」

不満そうな表情を浮かべた朋美は、ちらちらと風太郎のいる方を窺っている。目元が赤くなっているところを見ると、どうやら飲みすぎているようだ。

「確かに言ったけど、今はいいよ」

「今はいいって、今じゃなきやいつ相談するのよ。風太郎のクリニックに予約入れるにしても、一年先までいっぱいだって、この間テレビで言ってたでしょ」

それは、衣織も知っていた。風太郎がメディアに登場するや否や、クリニックは大繁盛。彼自身

はもちろん、他のカウンセラーもなかなか予約出来ないらしい。

「だって、わざわざ風太郎に相談とか……。なんか申し訳ないし、みんなのいる前で自分の事を話すのもちよつと……」

「なーに言ってるのよお。自分から積極的に動かなきゃ、彼氏なんか出来やしないよ！」

「わわっ、しーっ！ しーっ！ 朋美ったら、声が大きいよ！」

人差し指を唇に当て、衣織は必死に朋美に注意する。隣のテーブルにまで声が聞こえたのではないかと心配したものの、幸いこちらに注意を向ける者は誰一人いなかった。

「だってさ、衣織って昔から超がつくほどの奥手だし、いつまでたっても彼氏作る気配ないし、私本気で心配してるんだからね〜！」

ダメだこりゃ。完全に酔っ払いのお世話焼きモードに入っている。朋美は高校の時から何かと衣織の事を気にかけてくれていたが、ここ最近では、それが恋愛に関する事に集中している。

「わかった！ わかったから、もう少し小さい声で話してくれる？」

「はいはい。でもさ、ほんと誰かい人いないの？ 大会社なんだし、適齢期の男性とかいっぱいいるでしょうに」

朋美が痛いところをついてくる。

「そりゃいるにはいるけど……。正直あまり接点がないんだよね。近くに居るのは既婚の役員ばっかだし、独身の男性社員とは話をするきっかけすら、ぜんぜんないし」

普段会話するのは自分の父親や祖父と同じ年代の人ばかりで、同年代の男性社員との絡みは仕事

のみ。関係部署と直接やりとりをする事もあるが、そこから何かが生まれるわけでもなかった。縁がないものはないのだから仕方がない。

「ないたって、それじゃ駄目でしょ。考えてもみなよ、私達もう二十六歳だよ。あつという間に三十路みそじを迎えて、気付いた時にはもうアラフォーでしたなんて事になったら、目も当てられないだからね！」

まるでお見合いをすすめる親戚のおばさんみたいな口調で、朋美が言う。

「わ、わかってるけど、出会いがないんだってば。努力しようとは思ってるんだけど、なかなか……」

そう言つて下を向く衣織に、朋美は同情の顔を向けた。

「わかるよ。今日だつていつもよりおしゃれしてるもんね。だけどねえ……」

朋美の視線が、いきなり衣織のファッションチェックを始める。

「全体的にちょっと大人しすぎるんじゃないかな。そのワンピースも、会社のお偉いさん達には受けがよさそうだけど、同世代から見ると……真面目すぎて男がつけ入る隙もないって感じ？」

「つ、つけ入る隙って……」

やっぱり駄目か。朋美にまで駄目出しをされてしまった。自分なりに精一杯おしゃれして少しは進歩したと思つていたけれど、どうやら自己満足の域を出ていないようだ。

「メイクだつてそう。それ、ほとんどすっぴんと変わらないよ。衣織、素材はいいんだから、それなりの格好してばつちりメイクすれば、あつという間に彼氏とか出来ちゃうって！ まずは変わる

う。そして、恋をしようよ！」

肩をバンと叩かれた衣織は、勢いで前につんのめつてしまった。

「私だつて出来る事ならそうしたいよ」

部屋の中は、それぞれの話し声が入り交じつてだいぶ騒がしい。だから少しぐらい声を張り上げて、誰も気にしないだろう。お酒を飲んでいる事もあつて、衣織は普段隠している胸の内を語り始める。

「だけど、具体的に何をどうすればいいのか、わかんないんだもの。自分を変えたい……外見も中身も。それでもつて、素敵な彼と巡り会つて、恋をして幸せになりたい」

手にしたグラスをぐいと傾け、冷たいジン・ライムを半分ほど飲み干す。頭の中に、ぼんやりとある映像が浮かんできた。素敵な笑みを浮かべた、背の高い憧れの王子様あきがが。

ちらりと視線を移せば、風太郎の笑った顔が見える。彼こそ王子様に相応ふさわしい容姿と資質を兼ね備えた男性だ。

(おお神様！ どうか私に風太郎クラスの彼氏を与えたまえ！)

「そうっ、その意気だよ！」

朋美の力いっぱいハグを食らつて、空想の世界を漂ただよっていた思考が、いきなり現実を引き戻される。ふと気が付けば、朋美はもうレモンハイを立て続けに二杯空けている。ぐらぐらと身体を揺すられ、衣織の持つていたグラスの中身が零こぼれそうになった。

「朋美、平気？ だいぶ酔ってるよね？」

「平気よお。ね、今日はどこん飲もうよ。あ、あつちのグループにも誰かい人いないか聞いてみようか。ねえみんな、ちよつと聞いてくれる〜?」

朋美が、斜め前にいるグループに話しかける。

「もう、ちよつと朋美つてば!」

これ以上この話を長引かせると、しまいには風太郎の耳に入るかもしれない。

衣織は慌てて朋美を引き戻して、彼氏がいない事はここだけの話にしてくれるよう頼み込んだ。気になって風太郎をちらりと見ると、彼は次々に持ち込まれる相談事に耳を傾け、的確なアドバイスをしている。

(昔からああだったなあ。そりゃあ人気カウンスラーになっちゃうよね。私だって風太郎に相談したいよ。どうやってた彼氏出来ますか? どうすれば上手く変身出来ますかって……)

だけど、きつとこうやって思い悩んでいるだけでは何の解決にもならない。どうにかしてこの現状から脱出しなくては。それはわかっているけど、具体的に何をどうすればいい? 恋をするには? 自分の外見も中身も変えるために必要な事は? ああ、これでは堂々巡りだ……

「えー、寡もたけなわではございますが、一次会はこれで終了〜! 続いて二次会の会場に移りたいと思います」

賑やかな部屋の入り口に立ち、戸田が大声を出した。それを合図に、帰り支度を終えた面々が席を立ち始める。はつと顔を上げた衣織も、時計を見て帰り支度を始めた。いつの間にか、もう十一時を回っている。

「衣織、二次会行くでしょ? 私、子供の面倒は実家に任せたから、今夜は朝までオツケーなんだ。久々に羽を伸ばすぞ〜!」

立ち上がったところで、衣織は朋美に肩を抱かれた。

「んー、どうしようかなあ。明日は早くからちよつと忙しいんだよね」

明日は朝一番で役員会議がある。いつもより早めに家を出て、会議室の準備をしなければならぬ。

「えー、いいじゃん、今日くらい付き合つてよ。あんたつていつもそうだよ、放課後も部活終わつたら速攻家に帰っちゃつてさあ」

かなり酔っぱらっているらしい朋美は、傍らに置いていた衣織のショールを取り上げて抱え込む。「ねえ、ちよつとだけでもいいから行こうよ。じゃなきゃ、これ返してやんない」

猫撫で声で懇願され、衣織は仕方なく妥協案を出した。

「わかった、行くわよ。だけど、終電に間に合うように帰るからね」

「やったあ!」

朋美が、大げさに手を上げて叫ぶ。

気が付けば、部屋に残っているのは自分達だけだった。衣織は、朋美を入り口の外に押し出し、誰か忘れ物をしていないか一通り部屋の中を見回す。こんな癖がついたのも、担当役員である田代常務が忘れ物の常習犯だからだ。

「衣織、早く行こう。置いて行かれちゃうよ〜」

「ごめん、先に行つて。私ちよつとお手洗に行つてくるから」

朋美が外に出て行つたのを見送ると、衣織は店の奥にある化粧室へと向かった。

ふと振り返れば、廊下の向こうに戸田と並んで歩く風太郎の後ろ姿が見えた。会計のそばにいた男性陣が風太郎を囲み、店の外に出て行こうとしている。八年ぶりに三メートルほどの距離に近づけたというのに、結局それ以上近づく事は出来なかった。

(あーあ、結局風太郎とは一言も話せなかったなあ。この調子だと、二次会に行つても同じかも) 辿り着いた化粧室の前には、年配の女性客が四人、立ち話をしながら並んでいた。

列の最後尾に並んで、何とはなしに風太郎と初めて会つた時の事を思い浮かべてみる。

それは、高校の入学式の日。電車で一時間弱かかるその高校に進んだのは、衣織のいた中学からは彼女ただ一人だった。周りを見ても、当然誰一人知つた顔がおらず、緊張の中で式を終え、教室に入ったのを覚えている。

一クラスの生徒は全部で三十二名。衣織の後ろの席が風太郎で、すでに周りの注目を集めるほどのオーラを放つていた。

スポーツマンらしく髪を刈り上げ、きりりとした太い眉で、誰が見ても納得の美男子だったが、それだけではない独特の雰囲気がある。

誰にでも優しくフレンドリーだった風太郎は、すぐに人気者になった。そんな風太郎が後ろの席だつたおかげで、彼と話すうちに自然とクラスに打ち解けられている事に気付いた。

学期毎に席替えがあつたけれど、なぜかいつも席が近く班も同じ。それまで男子とはあまり話し

た事がなかったのに、風太郎が相手だとなぜか話しやすかつた。

話す内容も多岐にわたつて、普段突っ込んで話せない本の話や好きな映画の話も出来たり。

そうするうち、いつの間にか彼といるだけで胸がドキドキしている自分に気付いた。

あれだけの美男子だし、性格もいい彼の事だから当然といえば当然なのが、衣織がそんな気持ちになつたのは、生まれて初めての事だ。

だけど、風太郎に自分の気持ちを知られてしまえば、きっとこれまでの友達関係が崩れてしまう。そう考えた衣織は、誰にも気付かれないよう徹底的に自分の気持ちを隠す事に決めた。

(そういえば、なんで風太郎の事をあんなに好きになつちやつたんだろうな……)

特別な出来事があつたわけではない。気が付けば、もう彼の事が好きになっていた。そう自覚したのが、一年生の一学期半ば。三年生でまた同じクラスになれた時は、嬉しくて丸一週間浮かれ気分だつた事を覚えている。

ようやくやってきた化粧室の順番で、衣織ははつと我に返つた。用をすませ、急いで店の外に出て辺りを見回す。

「あ……あれ？」

店の前には、いくつかの酔っ払いグループがたむろしているものの、見知つた顔は誰一人いない。「えっ、嘘……。みんなどこ？」

もしかして、置いていかれたのだろうか。道の真ん中に進み、背伸びしながら視線をあちこちに巡らせてみると、遠くの方に薄い色のショールが揺れているのを見つけた。

「あつ……もう、朋美つたら！」

衣織が急いで駆け出そうとしたところ、手首をぎゅつと掴まれた。

「衣織！」

「えっ？」

驚いて振り向いた先には——にこやかな笑みを浮かべる風太郎の顔があった。

「ふっ、風太郎？」

（なんで？ どうして風太郎が？）

突然の展開に頭がついていかず、衣織は口をあんぐりと開けたままその場に立ち尽くしてしまつた。

さつきまで頭に描いていた高校生の頃の風太郎が、八年の月日を飛び越えて、目の前で笑っている。

「久しぶりだな」

「う、うん、久しぶり……」

完璧な笑顔、優しい声。それを数十センチの距離で見つめている今の状態が理解出来ず、衣織はパニックになる。

「えっと、どうしてここにいるの？ みんなもう二次会のお店に行っちゃったよ。ほら、あそこにいるの、そうだよな？ なんか私、置いてきぼりくらっちゃったみたいで……」

衣織が指を差した方向には、朋美に奪われたショールが、ゆらゆらと揺れている。

「ああ、さつきまでここで固まって騒いでただけど、行人人の邪魔になるからって俺が先に行かせたんだ。多分、半分以上は二次会に流れたかな。帰宅組はもうとっくに駅に向かった」

「そうなんだ……」

彼の顔と、徐々に見えなくなっていくショールを交互に見比べ、衣織は必死に頭を動かした。

風太郎はなぜここにいるのだろう。しかも、衣織と二人っきりで。

風太郎が握ったままでいる手首が、どんどん熱を帯びていつている気がする。

（いけない、冷静になれ、衣織！）

内心の動揺を悟られないよう平静を装い、衣織は問い掛ける。

「風太郎はなんでここにいるの？」

すると、風太郎は満面の笑みで答えた。

「衣織を見かけたから、待ってたんだ」

この上なく魅力的な彼の笑顔を、色鮮やかなネオンが照らす。濃褐色の瞳がきらきらと光って、まるで白馬に乗った王子様のように煌びやかだ。

（だ、だからって、なんで風太郎が待っているんだろう……？）

ほろ酔いの脳みそが一気に覚醒して、胸がドキドキしてきた。それと同時に、頬も火照ってくる。（八年ぶりだから、どうしていいかわかんないよ！ 話したいとは思ってたけど、まさかこんな形で二人きりになるなんて——）

突っ立ったまま目を瞬かせる衣織を見て、風太郎がクスツと笑う。

「こんな時間に女性を一人だけ置いて行くわけにはいかないだろ。たちの悪い酔っ払いに絡まれるかもしれないし。男連中は結構出来上がっちゃってたから、比較的しらふの俺が残る事にしたんだ」

「あ……、ああ、そうなんだ」

なるほど、さすが風太郎だ。的確に物事を判断して、一番良い対処方法を瞬時に選び出す。外見だけじゃなく、中身もかなりグレードアップした風太郎に改めて驚愕する。

高校時代からなら変わりない自分とは大違いだ……

「待たせちゃってごめんね。えっと、風太郎はこれから二次会に行くんだよね？」

「衣織は？」

「ちよっとだけ顔を出そうかなって。でも明日朝一で会議だから、終電に間に合うように店を出るつもり」

「そっか。俺はどうしようか迷ってるんだ。そしたらちよっと衣織を見かけたから少し話したいと思ってる」

「え？ わ、私と？」

思いがけない彼の言葉に、また心臓がドキリとする。

「うん。他のやつらとは全員話せたけど、衣織はまだだったからね」

「……そうなんだ。なんか、わざわざありがとう……」

「どういたしまして——って、なんだよ。妙に他人行儀な事言ってる」

照れてかしまったところを、風太郎に軽く笑い飛ばされる。そのおかげで、かえって気が楽になった。

「だって、まさか風太郎が待ってくれてるとは思わなかったから。私も、風太郎と話したかったんだよ。でも、あれだけ囲まれてたら無理かなあって。すごいね、風太郎。昔から人気者だったけど、今やそれが全国区に広がっちゃってるんだもの」

彼を目の前にして、しみじみとそう感じる。

「周りに恵まれたからな。いい先生に出会って、いい環境で働かせてもらって、いい感じで後押しされて今に至る、だ」

そうやって驕らないでいるところも昔のままだ。これだけのイケメンなんだし、ちよっとくらい自慢してもいいだろうに。元同級生というだけの関係だが、なんだか誇らしくて周囲に自慢したくなる。

「つと、ここにいと、通行人の邪魔になるな。ちよっとこっち行こうか」

「うん」

掴まれたままだった手首を軽く引かれて、ビルの合間のやや薄暗い路地に入った。

何気なく離された手首に、ほんのりとした温かさを感じる。風太郎といると、ドキドキもするけど、妙に落ち着く。この不思議な感覚は、高校の頃から彼と接するたびに感じていた。

「そう言えば、さっき飲み会で聞かえたんだけど、衣織って今彼氏いないの？」

「えっ！」

突然の質問に、衣織は思わず目を剥いた。

「嘘っ、聞こえちゃった？ 誰も聞いていないと思ってたのに……」

「しっかり聞こえてたよ。自分を変えたい、外見も中身も。そして、素敵な彼と巡り会って、恋をして幸せになりたいって」

「うわっ、そこまで聞こえちゃってたんだ……」

「うん」

向かい合って立つ風太郎とは、身長差が二十センチはあるだろうか。それを気にしてくれているのか、風太郎はやや前かがみになった姿勢で首を傾げる。

こうなったらもう開き直るしかない。妙に隠し立てするよりは、素直に打ち明けた方が楽になれる。

「……でも、当分無理そう。だって、恋をするにも自分を変えなきゃダメだし、だからって自分を変える方法なんて、何をどうやったらいいか……実のところ途方にくれちゃってるんだよね」

下を向いて、衣織はおろしたてのワンピースを見つめる。

「自己流で努力したところで、結果が伴わなきゃやってないのと同じだよ。こんなんじゃ、恋をして幸せになるなんて夢のまた夢かな……」

ふと顔を上げると、風太郎がこちらをじっと見つめていた。穏やかな表情をしているのに、なぜかやけにセクシーに見えて、一瞬息が出来なくなる。

「そんな事ないさ。正しい方法で取り組めば、それ相応の結果は出る」

「そうなのかな……」

「そうだよ。よかったら、俺がカウンセリングしてやろうか？」

「え……？」

風太郎のいきなりの発言に、衣織の思考が止まる。

「元同級生のよしみでさ。メンタル面からファッションまで、全部ひっくるめてカウンセリングする——いわば、衣織の個人的な恋愛カウンセラーってとこかな」

「……ほ、ほんとに？」

驚きのあまり、衣織はあんぐりと口を開けたまま風太郎の顔に見入った。ただでさえ忙しいのに、元同級生だからといってそこまでしてくれるなんて。

「うん、本当に。もちろん料金は取らない。俺、出来るだけカウンセラーの経験を積みたいんだ。雑誌やテレビに出てるとはいっても、まだまだひよっ子だしね。チャンスがあれば、新しいカウンセリング法を模索したり、チャレンジしてみたいと思って」

風太郎の目に、仕事に対する真摯な光が宿る。

なるほど、ギブアンドテイクというものか。衣織は恋愛に前向きになる事が出来るし、風太郎はカウンセラーとしての経験が積めるのだ。

「つまり……業務提携みたいなもの？」

「ははっ。上手い事言うな。そんな感じだ」

風太郎は、やっぱり風太郎だ。現状に甘んじる事なく、常に自分を磨こうとしている。衣織は、

うんうんと頷きながら姿勢を正し、改めて風太郎に顔を向けた。

「もし衣織が本気で自分を変えたいと思ってるのなら、俺は全力でそれをサポートするよ」

「もちろん本気で自分を変えたいって思ってるよ！ ほんとの本気、これ以上ないってくらい本気だから！」

風太郎からの願ってもない申し出に、衣織は思わず勢い込んで返事をする。

こんなチャンス、きつと二度と巡って来ないだろう。

「よし！ じゃあ早速だけど、これからうちのクリニックに来ないか？」

「え？ これから？」

『善は急げ』だ。ここからタクシーで十分くらいの距離にあるから。衣織、終電は何時？」

「〇時四十分だよ」

「そうか。じゃあそれに間に合うように、またタクシーで駅まで送るよ。それでいい？」

「私はいいいけど、風太郎は二次会行かなくていいの？」

「いいよ別に。これを機にもっと頻繁ひんぱんに同窓会やろうとか言ってたしな。またすぐにみんなに会えるよ」

「そっか——」

朋美には悪いけど、二次会には行かないとメールさせてもらおう。奪われたショールはまた今度会った時にも返してもらえばいい。

「でも、なんだか申し訳ないな。風太郎の貴重な時間を無料タダでもらっちゃうとか……」

風太郎は料金は取らないと言ってくれているが、やっぱり社会人としてきちんと支払ったほうがいいのかもしれない。

「だから気にしなくていいって。むしろ、衣織の時間を割いてもらう分、俺が支払いをしなきゃいけないと思ってるのに」

「わわっ！ そんな、滅相もない……！」

今をときめく人気恋愛カウンセラーが、無料でカウンセリングをしてくれるだけでもったいなさすぎる話なのに。

「そもそも俺が言い出した事だし、衣織は『クリニック』じゃなくて『俺』の個人的なクライエントだから。……ああでも、その代わり、ちよつと実験させてもらってもいい？」

「うん、もちろん！ そんなのぜんぜん構わないよ」

完全に恋愛ベタをこじらせている自分の事。むしろ、積極的にいろいろと試みてほしくらいだ。「そうか。じゃあまずは大通りに出てタクシーに乗ろう——つと、寒いだろ、これ着とけよ。衣織のショール、朋美が持って行っちゃったもんね」

風太郎はおもむろに着ていたジャケットを脱いで、衣織の肩にふんわりと掛けてくれた。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして。四月っていつでも、まだ夜は寒いからな」

何気なく見せてくれる優しさに、つい心臓が跳ねてしまう。

坂道を通り抜けて大通りに出ると、ちょうど乗客を降ろしたばかりのタクシーが停まっていた。

「あれに乗ろう」

後部座席に乗り込むと、風太郎がドライバーに行き先を告げる。大通りに出た車は、交差点を渡り指示された細い道へと入っていった。窓を流れるなんでもない街の風景が、きらきらと輝いて見える。

（まるで、お城に向かうお姫様みたい——）

まさにそんな気分のまま到着した場所は、白壁に「垣田メンタルクリニック」というプレートが掲げられている五階建てのビルだった。

衣織はタクシーから降りて来た風太郎の後に続き、レンガで出来た階段を五段ほど上って、ドアの前に立つ。バッグからカードキーを取り出した風太郎はドアを開け、衣織の方を振り返って手招きをする。

「ようこそ、俺の職場へ。今日は特別に貸切だよ」

風太郎の歓迎の言葉に、衣織は気持ちを落ち着かせるため肩の力を抜いて深呼吸する。

「静かでない場所だね。このビル全体がクリニックになっているの？」

「そうだよ。ドクターとカウンセラーが全部で六人。経営者の垣田先生は大学の先輩でもあるんだ。精神科医と臨床心理士の資格を持っていて、俺の目標であり尊敬する人だよ」

促されビルの中に入ると、暗かったフロアにぱっと明かりがつく。

温かみのあるオフホワイトの壁に、メープル色の床板。柔らかな曲線を描く受付カウンターの上には、ピンク色の薔薇の花が飾られている。

「結構雰囲気がかいね。メンタルクリニックって、もったかしこまったところかと思ってた」
そう言っ、衣織はきよきよと辺りを見回す。クリニックというよりは、ちょっとしたリゾートホテルのロビーみたいだ。

「クライエントがリラックス出来るようなつくりにしてあるんだ。カウンセリング用の部屋もそれぞれ少しずつ違っていて、各自の状態に一番合う部屋に案内して話をする。衣織は……そうだな、とりあえず上に行こうか」

エレベーターに乗り、風太郎が三階のボタンを押す。衣織は、少し前に立っている風太郎にちらりと視線を投げた。シャツの上からでも腕の筋肉がたくましく隆起しているのがわかる。高校の時よりも身長が伸びているし、身体つきも全体的にがっしりとしている。

（今もバスケ続けてるみたいだし、まさに文武両道って感じ。風太郎……ほんと、変わるいなあ……）

思えば、同窓会が終わってから、信じられない幸運が次々に起こっている。

店を出たら、高校の時に憧れ続けた風太郎が待っていた。それだけでも驚きなのに、彼は自分から衣織のカウンセリングを買って出してくれ、今その打ち合わせをするために彼の職場まで来ている。おまけに料金はかからないのだ。

（ちょっと待って。ほんと夢じゃないよね？ 私、そこまで酔ってないよね？ 日頃頑張っている貴女に、特別なプレゼントを——的な、どつきり企画だったりして……）

天井や壁にテレビカメラがないか探しそうになるものの、風太郎がそんな悪ふざけに加担するは

ずがないと、すぐに考え直した。

次第に、ちよつとした沈黙が気恥ずかしく感じられてきた。そこで衣織は、ふと頭に浮かんだ疑問を口にしてみる。

「風太郎って、普段からこんな風にクライエントさんを時間外で診たりするの？」

「うーん、どうしても必要となれば、時間外でも診る事はあるけど、それも予約を取った上だね。とはいえ今みたいにビルの中に二人つきりつて事はないし、こんな遅い時間に会うつて事は絶対にしない。仕事だつていう事ははつきりさせておかないと、何かとまずいからね」

「そっか……それもそうだね」

クライエントのメンタルに係わる仕事というのは、そういった面でもいろいろと気を使うものなのだろう。風太郎の場合は、ただ彼に会うために予約を入れる人もいるはず——そんな人に対して今みたいな事をすれば、勘違いされて大変な事になりそうだ。

(勘違い……私こそヘンな勘違いをしないように気をつけなきゃ)

風太郎はカウンセラーであり、自分はそのクライエント。そして元同級生であり、ただの友達。

(つて、何を改めて念押ししてるの？ それじゃまるで風太郎に恋をする前提で話しているみたいじゃない……！)

エレベーター到着のベルの音が響いて、三階フロアに降り立つ。廊下の突き当たりの部屋に入ると、そこは淡いピンク色を基調とした、まるでカフェのような明るい内装だった。窓のそばには飾り棚があり、丸テーブルの前に椅子がふたつ向かい合った形で置かれている。

「適当に座って待つて。今コーヒを淹れてくるから」

そう言つて、風太郎は部屋を出て行った。彼は、居酒屋で見た時よりもずっと、生き生きとした表情をしている。仕事が好きで、きつと毎日が充実しているのだろう。彼女はいないと言つてたが、今は仕事に集中したい時期なのかもしれない。

「お待たせ」

戻つてきた風太郎は、シャツの上にアイロンのきいた長い白衣を羽織っていた。カラカラと音を立てて押してきたワゴンからは、淹れたてのコーヒが香っている。

「あ、白衣着てる」

「一応カウンセリングだからね。この格好の方が雰囲気が出ると思つて。これもクライエントによつて着たり着なかつたりするんだ。白衣を嫌う人もいれば、逆にそれを見て安心するつて人もいるから。衣織はどう感じる？」

テーブルにカップを置き、風太郎がおどけたように両腕を広げて微笑を浮かべる。

「うん、安心する。この人になら本当の事を言えるつていうか、いろいろと相談に乗つてもらいたいつていう気持ちになる」

それプラス、これほど白衣が似合う人つて初めて見た！ と、心の中でこつそり感動する。でも、その格好で見つめられたりしたら、治療どころじゃなくなつてしまふそう。

「そうか、よかつた。自分なりにいろいろと考えてやつてみるんだけど、日頃クライエントにはこんな風にストレートには聞けないから、すごく参考になるよ」

衣織の前に腰掛けた風太郎は、そう言って嬉しそうに笑った。その笑顔に見惚れつつ、衣織は同窓会の時に聞いた話題を振る。

「あ、そうだ、風太郎って今もバスケット続けてたんだね」

「ああ、たまに集まってよそのチームと試合したりするんだ。あとは、適当に自主練かな。まあ、ほとんどその後の飲み会がメインだけだね。衣織は？ 英語研究会の連中と集まったりしないの？」

「うーん、卒業して半年経った頃に一度集まっただけかな。同窓会もそうだけど、集まるのって、まとめる人がいないと難しいよね」

「そうだな。バスケットの場合、そういうのが三人ぐらいいるから、ヘタしたら月に三回くらい呼び出しがかかるよ」

「へえ、いいね、和気藹々って感じ。運動部の中でも、バスケットは特にみんな仲良かったもんね」

「マネージャーもない、野郎ばかりの部だったもんなあ」

そんな風に、しばらくの間、二人はコーヒーを飲みながら昔話に花を咲かせる。

「さてと。どう？ 少しはリラククスしてきた？」

「あ、うん」

そう言われて、さつきまで多少残っていた緊張がいつの間にか解けている事に気付いた。さすが人気カウンセラーだけあって、その辺りの気遣いはばっちりだ。

「衣織が高科商事に入社した事は人づてに聞いてたけど、秘書だなんてすごいな。仕事はきつくないか？」

「うん。大変な時もあるけど、すごくやり甲斐があるの。昔から裏方タイプだから、結構秘書っていう仕事が性に合ってるみたい。中学の頃から好きで頑張ってた英語も使えるし」

就職活動をする時、秘書や英語を使える仕事にこだわっていたわけではなかった。だけど、第一希望にしていた高科商事に採用が決まって、入社当初から今の仕事に就かせてもらったのは、幸運だったと常々思っている。

「そんなに仕事頑張っているのなら、見合いとか紹介とかこないのか？」

「えっ？」

風太郎の言葉に、衣織は驚いて首を傾げる。

「だって、衣織って性格もいいし、取締役の秘書ともなれば華やかな場に出る事もあるだろう？ 重役から見合い話が舞い込んだりするんじゃないかと思って」

「……朋美にも同じような事を言われたけど、そういうのはないよ。先輩や同僚にはそんな人もいるけど、あいにく私には関係ない話みたい」

事実、先輩秘書の一人は、すすめられた見合い話に乗って去年めでたく寿退社を果たした。

「ふうん。上司もそういう点では、ちょっと見る目ないな。もし俺が衣織の上司なら、一番の良縁を衣織に持っていくのに」

「ほんと？ 今までそんな風に言ってくれた人なんていなかったよ。……あれ？ もしかして、もうカウンセリングに入ってるの？」

衣織がはっとした表情で尋ねると、風太郎が笑顔で続ける。

「カウンセリングは抜きにして、素直な感想だよ。衣織の他にどんなメンバーがいるか知らないけど、性格の良さや努力家っていう点では間違いなく衣織が一番だと思うな。だいたい会社の男どもは何してるんだ？　せつかくこんないい子がいるってのに……同じ男として情けないよ」

風太郎は、口をへの字に曲げ、呆れたように首を横に振った。

「あ、ありがとう……。少し、昔の話をしたいいい？　私ね、大学の頃、男の人にデートを申し込まれた事があったの。バイト先で知り合った人だったんだけど、ちょっとだけ付き合ってた……」

「ちょっとだけ？」

風太郎が、二杯目のコーヒをカップに入れながら聞き返す。

「そう。二ヶ月経ったところで、急にフラれちゃったから」

「向こうから申し込んだのに？」

「うん——といつても、ちゃんと付き合おうって言われたわけじゃなかったんだけどね。女子大で寮生活だったから、男の人と話す機会なんてめったになくなって。いざ一緒に出掛けても、何を喋ればいいのかよくわかんないし、緊張のしっぱなしで一緒にいても気まづくなるばかりだったんだ」

二杯目のコーヒにミルクを入れ、衣織は添えられたスプーンを手を取った。くるくると掻き回し、香り立つ匂いを胸いっぱい吸い込んで吐き出す。

「で、言われちゃったの。『衣織って、一緒にいてもなんかつままないんだよね』って。私、恋愛に向いてないのかな……。もし今後誰かと付き合っても、また同じような失敗をするんじゃないか、つまらないって言われるんじゃないかって……。そんな風に思ったりするんだ」

話しながら、衣織は自分でも驚いていた。

こんな風に誰かに心の内を吐露するのは、初めての事だった。しかも、自分がそんな事を思っていた事実に、今初めて気が付いたという有様だ。

「続けて——」

風太郎の低く落ち着いた声に促されて、衣織は小さく息を吸い込んでまた話し始めた。

「変わりたい、恋がしたいって言うけど、本当はそうなるのが怖いのかも……。そもそも男の人が苦手なんだと思う。仕事では平気でも、いざ恋愛となると……。男の人って何を考えているかわからないんだもの。周りにいるカップルみたいに、自分が彼氏とデートして幸せそうに笑ってる場面とか、想像つかないの」

「……そうか」

風太郎が、ゆっくりと頷き、優しい声音で話し始める。

「未知のものに対して、恐れを感じるのは当たり前前の事だ。焦らず一歩ずつ進んで行けばいいよ」

「うん……」

柔らかな彼の声が、ざらついている心を落ち着かせてくれる。気持ちが緩んだ衣織は、もうひとつの不安も口にした。

「もしかしたら、いつも地味な服装ばかりしているから、魅力がないのかな？　だけど、たまに違う服を選んでうまくいなくて……」

「そう？　俺はそのワンピースいいと思うけどな。春っぽい色合いだし、似合ってるよ」

「あ、ありがとう……」

まっすぐに衣織を見る風太郎の瞳。その嘘のない褒め言葉に、素直に嬉しくなる。

「だけど、やっぱりもつと変わらなきゃって思うの。顔だっけいつまでたつても童顔で色気ないし……もちろん外見だけ変えても駄目だっけというのはわかってるんだけど……」

不安そうな顔をする衣織を見て、風太郎は柔らかな微笑みを浮かべた。

「それについては心配しないでいい。そのために俺がいるんだ。俺に任せて——衣織はきつと変わる。外見も中身も。俺が保証するよ」

力強い彼の言葉に、衣織は心が和むのを感じた。

（ああ、この感じだ——）

風太郎と一緒にだといつもドキドキするのに、なぜかとても居心地がよかった。彼が素敵すぎてそわそわと落ち着かなくなるのに、同時に安らぎも感じるのだ。

風太郎がくれる励ましや、慰めなぐさの言葉は、いつだって彼の心から発せられるものだった。

彼の優しさはきつと天性のもの。外見より何より、風太郎のそんな人柄に衣織は惹かれたのだ。だからこそ、あんなにも好きになって、今もその時の事を懐かしく思い出すんだろう。

ふと、肩にまだ風太郎のジャケットを羽織ったままでいる事に気付いた。ぶかぶかで自分には大きすぎるのに、妙に身体に馴染んでいて、借りている事を忘れてしまっていたのだ。

「あ、これありがとう。おかげで風邪を引かずにすんだよ」

ジャケットを差し出した衣織の指先が、それを受け取る風太郎の掌てのひらに触れた。リラックスして

いた身体に、一瞬だけ稲妻が走るのを感じる。

いったいこれは何なのだろう——？

そんな衣織の動揺をよそに、風太郎はカップの中のコーヒーを飲み干し、ワゴンの上のドリッパドリッパーに手を伸ばした。

「おかわり、どう？」

「う、うん、いただきます」

衣織はちょうどいい温度になったコーヒーを口にし、香りを楽しみながらゆっくりと飲み込む。

（まさかこんな風に風太郎と話せるなんて……同窓会に出てよかった）

風太郎への想いは、八年の年月の中で自分なりに折り合いを付けて、ちゃんと昇華させた。だけど、こうしてまた二人で話せば、純粹に嬉しいし、まるで高校の頃に戻った気分になれる。

「なんだか、話したらいろいろとすっきりしちゃった。つまらないって言われた事も、気にならなくなってきたよ」

「そりゃあよかった」

にっこりと微笑んだ風太郎は、衣織の顔を見て目を細めた。

「言っとくけど、衣織はつまんなくなんかないよ。結構おとぼけだし、高校の時も見ていて面白かった。今もそれは変わらないみたいだしな？」

「おとぼけ……って、ひっどーい！」

「いや、いい意味で抜けてるところがあるって事」

ひとしきり笑って、お互いの顔を見てまた微笑を交わす。そんな気軽な感じが、ひどく心地いい。「それを見抜けずに馬鹿な事を言う奴は、ほっとけばいいさ。俺からすればとんでもない間抜け野郎だな」

風太郎はそう言いながら、衣織の方に向けて椅子を数十センチほど移動させた。

「衣織は恋愛に向いてないんじゃないかと、ただ単にいろんな事が未経験で、そのせいでちょっとした恐怖心があるだけだよ。恋愛なんて最初は誰だって初心者だからな。失敗して当然だし、経験を積んで慣れていけばいいんだ」

「……うん」

今夜風太郎と過ごす中で、一番近い距離に彼の瞳がある。明るく柔らかな照明の下で、目の当たりにする風太郎の濃褐色の瞳は綺麗だ。

（……って、近い！ メイク崩れてないかな？ まさか、お酒臭かったりとかしないよね？）

咄嗟にいろいろな心配事が頭に浮かぶ。だからといって、今更どうする事も出来ないが、これからカウンセリングを受ける身として、改めて男性に向き合う事を意識した大切な第一歩だ。

「さてと……」

風太郎が表情を引き締めて、衣織を見つめる。

「じゃあ、改めて確認するけど……衣織の場合、女子大で寮生活してたし、就職して以来ずっと女性ばかりの秘書課勤務で、男に慣れていない。そうだな？」

軽く首を傾げられて、衣織はうんうんと頷く。

「仕事が絡むと平気なんだけど、それ以外だと全く……」

「なるほど」

神妙に頷いた風太郎は、傍らに置いていたクリップボードを手にして、何やら考え込んでいる。

「話を聞きながら、衣織に合ったカウンセリングを考えていたんだけど、ひとつどうかなと思ってるものがあるんだ。——俺と疑似恋愛をしないか？」

「……はいっ!？」

ぎじ……れんあい？ 今、風太郎は疑似恋愛と言った？

「そう、疑似恋愛。カウンセリングをする上で、俺と恋人同士になるって事だ」

「恋人……同士。私が、風太郎と……?」

いきなりの申し出に、脳みそがパニックになる。

「普通の恋人同士と同じ経験をやる事で、経験値を積んでいくんだ。その中で、男そのものに慣れる。少しずつ段階を踏むから、変化していく自分にも徐々に慣れるはずだ。そして、自分の手で幸せを掴めるようにするのが最終目標になる」

なんとか今言われた事を理解しようと頭をフル回転させる衣織に、風太郎が優しく続ける。

「衣織は、男とか恋愛について知らない分、すごく臆病になってる。だから、実践的なカウンセリング法が一番即効性があると思った。衣織も、俺とならそんなに固くならずにすむだろ？」

そう言われ、衣織はとりあえず頷いた。確かに、顔なじみだからか、男性である風太郎と今は普通に話が出来ている。

「うん……風太郎が相手なら、そんなには緊張しなくてもすむかも」
「よし、じゃあ決まりだ。八年ぶりとはいえ、今も衣織は俺の大切な友達だし、心から信頼している。だからこそ出来るカウンセリング法なんだけどな」

——俺の大切な友達。

そんな風に言われて、嬉しくないわけがなかった。衣織を見る彼の眼差しは、優しい上にとても真摯だ。

「ありがとう。私だって同じ気持ちだよ。風太郎に任せれば大丈夫だって思ってる。——でも、具体的に何をどうすればいいの？」

衣織の言葉に、風太郎は口元を綻ばせた。

「基本、俺がリードするから、衣織は楽に構えていたらいいよ」

「えっ、それだけでいいの？」

「うん、自然体が一番だからね。じゃあまず、カウンセリングをするにあたっての基本的なルールを伝えておこうか。——ああ、昔みたいに自分で書き留めた方がやりやすいか？」

「あ、そうだね」

衣織が頷くと、風太郎にクリップボードとペンを渡された。なんだか一緒にクラス委員をしていた頃に戻ったみたいで、懐かしくなる。

「第一に、さっきも言った通り、カウンセリングにかかる料金は一切発生しない。第二に、カウンセリング中は二人共恋人同士になり切る事。そうでなければ、中途半端な効果しか出ないから」

恋人同士になり切る？ それはどういう風にやるのだろうか。ペンを持つ指に、知らず知らず力が入る。

「第三に、恋人同士だから、多少のボディタッチが発生する。具体的な内容は、その都度説明するよ。もちろん、無理強いはいしない。嫌と言えばすぐにやめるし、衣織が出来るところまでしかやらないから」

(ボディタッチ……！)

ペンを走らせながら、具体的にどんな事をするのか、衣織は想像しようとした。だけど、あまりにも現実味がなくて、まったく思い浮かばない。

動揺しつつもすべてを書き終え、『基本的ルール』と題したメモをざっと読み返す。

(なるほど……これに従ってカウンセリングを進めていくんだ……)

擬似恋愛だのボディタッチだの、多少——いや、大いに気になる部分はあるが、とりあえず風太郎に任せておけば間違いない。

「デート中は基本手を繋いでいる事、無理をしない事も大事な。あとはあまり深く考えず、気楽にやっていこう……と、だいたいこんな感じ。何か質問はある？」

そう言われて、顔を上げた衣織は風太郎を見る。彼の瞳は、高校の時と同じ嘘のないまっすぐなものだ。彼なら、きっと自分を正しい方向に導いてくれる。そう思い、衣織は口を開く。

「カウンセリングはいつやるの？」

「そうだな……毎週土曜の午後っていうのはどうかな。具体的な時間と場所は、その週の金曜まで

に俺から連絡をする。何か用事があったら、衣織の方からも遠慮なく連絡してほしい」
「うん、わかった」

「他には？」

「えーっと、今のところは大丈夫かな」

ここまでできて、にわかには緊張してきた。

人気カウンセラーを、毎週独り占め出来る——それを再認識すると、あまりにも恐れ多い事のように思えてきた。

「じゃ、そういう事でよろしく。衣織、一緒に頑張ろうな」

「よろしくね！ 風太郎」

互いに手を差し出して握手を交わし、にっこりと微笑み合う。

なんて頼もしくて男前な恋愛カウンセラーだろう！

（私、変わるよね？ 素敵な彼と巡り会って、恋をして幸せになれるよね？ ……風太郎がついてるんだもの、きつと大丈夫！）

衣織は風太郎の手を握り締めたまま、自分の幸せな未来を確信した。



月曜の朝、衣織はいつもより早く起きた。

朝一で会議があるので、元々早めに起きようと思っただけなのに、目覚まし時計が鳴る前に自然と目が覚めてしまったのだ。

ベッドから下り立ち、洗面台に向かう。昨夜は自分でもびっくりするくらい気持ちが高ぶっていた。おかげでなかなか寝付けなかったものの、四時間ちよつとの睡眠でも頭は意外なほどすっきりとしている。

鏡の前に立って、起きたばかりの自分の顔を見つめた。

たまごのようにつるりとした顔は、相変わらず幼くて色つぼさの欠片すら見当たらない。雑誌のメイク法はどれも微妙に合わなくて、試すのも億劫になってしまったほどだ。

だけど、そんな自分とももうおさらばだ。

「聞いて驚け。私には、イケメン恋愛カウンセラー様がついているんだぞっ」

鏡に映る自分に、思い切り威張ってみる。そうだ、その通り。何の心配も要らない。

昨日取り決めたカウンセリングの『基本的ルール』は、水色の便箋に清書して洗面所にある鏡の側に貼った。そうすれば毎日ルールを確認出来るし、気合だつて入る。

思いを新たにして身支度を整え、マンションを出て駅への道を歩いた。